



賑わいが混じり合う

～下北沢における「路地空間」の立体的利用と再生～

永田 陽子 (ながた ようこ)

日本大学 理工学部 海洋建築工学科



長い年月をかけて街並を創り上げた「路地空間」。しかし、今再開発によってその空間が消えようとしている。区画整理を目的とした便利で快適な町づくりを優先するためにこの空間を容易に取り壊していいのだろうか。

本計画では、街並の継承として既存の建材を再利用することで、下北沢の「路地空間」を建築空間に創出し、その場所への愛着、場所での固有性を生み出している建築や路地を立体的に拡張する。

そこで生まれた「路地空間」は人々を導き、賑わいは延長し続ける。



講評 まさに今、「路地空間」が再開発の名のもとに、消えようとしている。安易にこの場を失ってしまっているのだろうか？僕はその解であるこの作品の前に立った時、ある衝撃が走った。なんという建築手法だろうか！スロープによる立体路地の創生、過去の記憶と歴史がしみ込んだ壁を切り取り、多様な建築空間として再構築する。この、わくわく感は何だろう。ひとつ納得して、またじっと見入る。みるみる作品に引き込まれていく、路地を上って行くと開口とスロープの関係が用途を生み、リズムを与える。そして、この建築に対する作者の熱い想いは、緻密な構成と展開力・粘り強さと継続力、時流背景を捉える句で豊かな感性により開花した。最後に、「想いが心にある建築は、必ず誰かが見てくれる。」心とは、「建築をつくる者の心」この作品がおおくの市民の目に触れ、その心を振動させた。

(審査員：信太 義晴)

